

『おかめ笹』

——滑稽小説という名の笑えない小説——

松田良一

I

大正五年という年は、荷風にとって厳しい決断の年であつた。身の回りのことでは、不良息子と自認していた荷風が唯一の親孝行と思い就職していた慶応義塾大学教授の職をこの年三月、辞してしまつた。さらに、父の死後に氣まづくなつていた弟威三郎との軋轢が決定的となり家族親戚縁者から遠ざかり、進んで孤立の道を歩みだしたのである。文学の面でも、『三田文学』の編集から辞し、新たに榎山庭後、井上啞々と雑誌『文明』を、四月に創刊したのである。『三田文学』では、たとえば「色男」(『新橋夜話』所収)というタイトルを「名前が下等」^{注(1)}という大学当局からの批判で「若旦那」に変更するなど創作者として苦痛を強いられてきた。こうした大学からの干渉で果たしえなかつた自由な仕事を、この『文明』で精力的に展開しようとしたのだ。この頃、文壇は「遊蕩文学」撲滅論議が盛んで、この動向を苦々しく思つていた荷風は、大学、そして家族親戚からも自由になつて、鬱積した忿懣を爆発させる

『おかめ笹』

かのように仕事をした。たとえば猥褻の意義を論じた「猥褻獨問答」や、遊蕩文学撲滅論議の標的になりかねないような花柳小説『腕くらべ』を『文明』に載せるなど、自由に思うところを綴った。当然、反発もあり、とりわけ慶応義塾批判のため『三田文学』系の文人からの批判は強かった。荷風は「文明一周年の辞」(大6・3)で、反論する。

三田の文人中近く帰來せしもの文明を一覽して甚だしく余が芸術家としての態度の不真面目なるを攻撃したりと聞く。毀譽元より吾人の関知する処に非らざれども、暫く雜誌の埋め草として無用の弁を費さしめんか、そもそも真面目といひ不真面目と称す其の意果して何ぞ。真面目は人の正道なり常軌なり。然れども人は又時として不真面目ならざる可らざる事あり。不真面目ならん事を欲して止まざる時あり。痛烈なる滑稽諧謔の深意實にこゝに存せずや。自然主義以降我が文学只管其の常軌を近世北欧の作家に仰ぎしより、新進氣鋭の作家にして滑稽諧謔の何たるかを解すもの其稀なるに至る。彼らは伊太利亜歌劇中の人物の如く大に笑ひ大に戯れ大に罵るの快事を知らず。只ウエルテルの如く憂悶するにあらずんば詩客文人の資格を欠くものとなすに似たり。何ぞ凶らんゲ―テも亦時に祭日の農民の如く戯れ笑ふ事ありしを。

吾人屢野卑醜陋なる現代社会の事相に接するや時に駄洒落まじりの戯文を弄し以て聊か溜飲を下げんと欲す。吾人の見識元より高からず其の辞章亦甚拙し。然れども此の如きの故を以て直に吾人の態度を不真面目なりとなさんか。かのラブレエ、スカルロン一派の滑稽文学の如き果して之を如何とするものぞ。

(傍線は筆者による)

荷風の芸術態度を不真面目ではないかという批判に対して荷風は、その批判は「滑稽諧謔の何たるか」を知らないためだし、真面目という切り口だけで文芸を見るなら、イタリアオペラの面白さもラブレエの「滑稽文学」も到底正當に評価理解できないのではないかと反論した。おそらく、この時荷風は「滑稽諧謔」の意味について改めて噛みしめ、

自らの発言を証明すべく、小説での方法化に心を動かされていたのではないか。滑稽小説『おかめ笹』が執筆開始されるのは、それから間もなくのことであった。『おかめ笹』が、荷風に対する不真面目批判に應える形で生まれたと同じように、実は『腕くらべ』も「遊蕩文学」撲滅論議や、『夏姿』（大4）などの発禁、「猥褻独問答」の問題化などに反発するなかで構想された。これまで『腕くらべ』と『おかめ笹』は、しばしば並べたてて論じられ、たとえば艶麗な『腕くらべ』と、非叙情的な『おかめ笹』などと比較され評価されてきた。^{注2)}しかし、ここで注目したいのは、両作品が大正四年から六年頃の文壇社会情勢に強く反発して書かれたという創作動機が根っここのところで結びあっていたという点である。このように両作品も反発や批判をベースにしていただけに、作品のテーマ性は明確で、方法意識も具体的であった。『腕くらべ』では猥褻批判に対して猥褻そのものの意義を具体的に作品で表現するという、いわば「猥褻の方法」を具体的に実践した。そして『おかめ笹』は不真面目批判に対して「滑稽諧謔の方法」を使って作品化したのであった。『腕くらべ』を書いている大正六年九月に、「滑稽諧謔の方法」を援用した『おかめ笹』を起稿した。つまり、江戸文学にあった「猥褻の方法」と「滑稽諧謔の方法」を、時代批評として、また文学方法として意識的に活用することに熱い情熱を荷風は、大正五年から六年にかけてもったのである。いわば『腕くらべ』で「猥褻の方法」の援用を決意した時、もう一つの江戸文学の方法の活用を荷風は思い立ったのである。これは『花火』（大8・12）の、いわゆる大逆事件の囚人馬車を見たことを契機と説明する「戯作者宣言」と連動していたことは間違いない。『おかめ笹』は、この道程から生まれるべくして生まれたのである。

その歩みは、親戚縁者から遠ざかり、慶応義塾大学をやめていった人生決断とも呼応していた。社会的な地位を捨て、いわば江戸町人のような自由な視点をもって、権威や俗悪なものに遠慮なくものを言える立場を確保したのと「猥褻の方法」「滑稽諧謔の方法」の援用は連動していたのだ。『腕くらべ』の「猥褻の方法」については、かつて拙論「腕

くらべ」論——猥褻の方法と風俗の方法——」^{注(3)}て述べたので省略するが、『おかめ笹』で援用した「滑稽諧謔の方法」とは果たしてどのようなものであったろうか、その点について記してみよう。

II

荷風自身は「野卑醜陋なる現代社会の事相に接するや時に駄洒落まじりの戯文を弄し以て聊か溜飲を下げんと欲す」と言い、「駄洒落まじりの戯文」と控えめだが、『おかめ笹』は相当計算つくされたものになっている。『おかめ笹』で使っている「滑稽諧謔の方法」は、おおよそ七つの手法（テクニク）によって成り立っている。

その第一は「見かけと実態のちがいを暴き描く」という手法である。見かけは立派だが、中身は相当俗悪なものになっている。読者にその落差を見せるという手法である。芝居でいうなら、観客（読者）に、劇中人物の実態をそのとどかせてやるのだ。当の本人は、自分は立派で世の敬意を集めて当然と考えているが、裏を知った観客は失笑させられるばかりである。たとえば、芸術家の内山海石や高級官僚大須賀顕正の表と裏の生活ぶりあげられる。内山海石は岡山派の大家で、帝室技芸員、東都画院評議員、公設展覧会審査委員など沢山の肩書きをもち『現代書画人名辞書』にも記される有名芸術家である。しかし、その名士ふりと違って、弟子には盆暮れに謝礼を持つてくるような金持ちの子弟をとるか、鶴崎巨石のような腰の低い太鼓持ちのような人物しかとらない打算家である。「表面は世事に疎い美術家顔しているが、金銭上の事にかけてはさすがの鶴崎もしばしば舌を捲く位」と語り手に書き込まれる。読者は語り手の辛辣な書き込みに驚く。出入りの画商たちと海石の会話が、高尚な芸術談議ではなく金儲けの胡散臭い

ものであることを、出入り幸水堂と海石の話題が土地の話になって、鵜崎が気をきかして中座するところで読者も知らされる。しかも、雑誌『円満倶楽部』の訪問インタビューでも、読者の前では鷹揚に構え、鵜崎を従者のように取り扱い大物ぶりを見せながら、その記者が帰ると畳をタバコの火でこがしたと大騒ぎする。大物芸術家の表と裏をみせるという伝統的な滑稽の方法を読者はみせられるのだ。

また、大須賀顕正も某県の参事官から知事に昇りつめた高級官僚であったが、今は某銀行の監査役と、旧藩主足利家の相談役になっている。社会的には中々立派な経歴の持ち主といっていだろう。しかし、これらの肩書きは媚び諂いをたくましくしての獵官活動の結果だった。現在とは違ってその頃の知事は選挙を経ない中央からの任命で政權と連動しており、四選とか五選とか長く務める知事もいる今日とちがって、いつまでも続けられるわけではない。退職時には「終身月給の取れる勅選議員か宮中顧問官」になろうとして大須賀顕正は画策する。しかし、それは果たせず、やっと手に入れたのが銀行の監査役と、旧藩主足利家の相談役であった。つまり、その地位もあまりきれいな形で手に入れたわけではないのだ。ともかく、地位そのものは一定の社会的評価が得られるにしても、在任中に大須賀がしたのは茶屋女に子供を生ませたりするなどその地位に見合う業績ではなかった。態度も相手を見て、弁舌巧みに鷹揚に見せたり、相手が弱いと見れば「尊大に構えて圧服させる術」も心得て、こわもてな態度に出る。また、金銭に対する執着は強く、その地位を利用する。出入りの古美術商と結託して彼らの品物を預かり客間に飾る。すると、訪問する成り上がり紳士が、大須賀家に飾ってあるものだからと信用し買い求める。このあと、大須賀は古美術商から礼金をもらうという仕組みだ。語り手から、まるで大須賀の客間は「道具屋の店先」と皮肉られる。こうして、顯官や著名な美術家の、醜くあざとい生體を読者に披露するのである。当の本人が立派な人間と自分のことを考えている分だけ滑稽さが増すしかげになっている。

二つ目の「滑稽諧謔の方法」は「思惑のちがいを描く」という手法である。二人の人物が、それぞれ別の思いをもつて向き合い、事が運ばれる。読者は事件や事柄が、異なる思いの交差から展開するのを覗きみることになる。人間世界の皮肉な絵模様は滑稽さを感じるのである。『おかめ笹』には、そんな思惑ちがいの人間交差のドラマがふんだんに描かれる。たとえば内山海石の子息内山翰と大須賀顕正の令嬢蝶子の結婚である。内山海石は元知事の令嬢と結婚させることで家にハクがつくと考えているし、大須賀顕正は県の参事官時代に茶屋女に生ませ、今は若い後妻との仲もよくない蝶子を早くかたづけたいとおもうところの縁談話で、同床異夢の結婚であった。まさしく上流家庭にありがちな結婚話といつていいかもしれない。雑誌『田満俱樂部』の訪問インタビューでも、記者の方は出戻り娘俊子と学習院女子部で評判の美人の照子という二人の姉妹のいる家庭取材するのが本当の思惑だが、海石は自分自身が主たる取材対象と思い、自分の師匠のことなど画壇に目をこらした話をしつづけ記者を辟易させる。しかし、辟易させていること自体を気づかず、海石の滑稽さは増す。そのほか翰と芸者君勇の思惑違い、翰と鵜崎巨石の白山での遊びの思惑ちがいが、文部省展覧会における画工、新聞記者、書画屋の思惑ちがいが、すれ違う思いが描かれる。それは個人の揺らめく心の内側を丹念に追求するというような近代的な心理描写とも違い、互いの思惑がズレたまま事が進行するという滑稽な人間模様を狙ったものであった。

三つ目には「偶然の力による皮肉な結果を描く」という方法である。常識的な道徳では、悪いことをすれば悪い結果を招くと教えられる。真面目な人は良い行いにはよい結果を、悪い行いにはそれなりの報があつても仕方がないと思う。むしろ、因果応報であつてほしい。でなければ、自分の真面目さがなにかしら無駄のようでくやしい。しかし、現実には、良いことが良い結果を招くとは限らないことも多い。時には、悪いことが皮肉にも良い結果を生むことがある。人の世がしばしば滑稽にみえるのは、そういう時だ。『おかめ笹』で使われた滑稽の方法の一つに、こうした

「偶然の力による皮肉な結果」を描いてみせることがあつた。たとえば、鵜崎巨石の行いが招く皮肉な結果の数々である。第十四章で待合愉快の臨検に遭遇しトバク容疑で巨石と内山翰は警察に拘留され、そのことが新聞に書かれる。巨石は留置場から出て家まで来ると、軍人になっている弟と妻が新聞記事について話をしているのが聞こえ、逃げだす。その時、通りの道で、家出しようと出てきた内山翰の新妻蝶子と出会う。蝶子を連れて自宅に戻ると、不意の主入筋のお客に妻の慶は新聞記事について夫を責める機会を失い巨石は難を逃れる。師匠の内山海石の家でも、蝶子の家出で家の名譽が傷つけられたと大騒ぎしているところに蝶子が巨石の家で保護されているという知らせで、新聞記事の件は軽いお叱りだけですむ。さらに、これがキツカケで翰と蝶子夫婦に迷惑を受けているのは鵜崎巨石ということになり、かえって巨石は師匠家族の信頼を得る。まさしく、蝶子の家出が招いた皮肉な幸福であつた。さらに娘の不行状を公になることから救つたとして蝶子の実家大須賀顕正からも招きを受け、厚いもてなしを受ける。大須賀は今後、娘の蝶子のお目付け役として巨石を信頼したのだ。やがて大須賀から足利家の宝物売り立ての臨時雇員に抜擢された。まさしく不運な拘留事件と蝶子の家出は「開運出世の道」を巨石に開いた。不運は幸運のタネになることさえある、実に人の世は滑稽なものであることを語り手は読者に示す。この滑稽さは終局に向かって増幅する。偶然、大須賀顕正の若い後妻と同家の書生の逢引きを見てしまい、巨石は後日、口止め料として三百円を受け取る幸運に恵まれる。別に要求したわけではない。不倫相手の書生が勝手に持ってきたのだ。少し気分の良くないそのお金の処理に悩むが、馴染みの芸者小花の独立資金にその金を使うことにする。あぶく銭はあぶく銭として処理するということか。しかし、そのことで巨石は良い目を味わうことになる。小花に感謝された鵜崎巨石は今や旦那扱いで、長火鉢の前に座る身分となる。こうして内山海石や大須賀顕正、両家の恥部に関わつたおかげで、脅迫するわけでもないのに巨石には自然と金品が流れこむ。足利家の宝物売り立てでは、売り立て事務所から慰勞金、大須賀家から心付け、幸

水堂から礼金、雲林堂からは口利き料など、鵜崎巨石の懐はホクホクとなる。このように小説は思いもかけない巨石の幸運の成り行きを滑稽味たっぷりに描くのである。

四つ目の「滑稽諧謔の方法」にあげられるのは「人間的弱点のリアリズム」がある。人が生きてゆく上で見せるさまざまな欲望、見栄をきつちり描く、俗な言い方をすれば「小市民のせこさ」をためらわずリアルに描きぬくという手法である。読者はその「せこい振る舞い、心理」を作中人物に見て、「うん、それってあるある」と一寸隠されていたことを言いあてられたような、くすぐられたような滑稽味を感じる。もちろん、そんな「小市民のせこさ」を少しも持ち合わせていない清貧な読者は、滑稽味を感じる事はなく、逆に薄汚い人間理解と怒りだすかもしれない。『おかめ笹』で、その「小市民のせこさ」を読者に一番多く曝け出すのが、鵜崎巨石である。たとえば、第八章で財布の中が十円札ばかりで、チップに惜しいと思いながら十円を渡す巨石の心持ちの「せこさ」。また、食事代をうかせようと、昼食や夕食時をねらって師匠内山海石家を尋ねる巨石。尊大な態度の内山家の人々には「情けないような同情をひくような態度」をとったほうが得策として卑屈とも思える姿勢をとる巨石の心根。警察に逮捕されたとき、新聞記事にどうなっているのか知りたく新聞を買う。この時、語り手に「懷中から錢を出して新聞を買ったのは生まれてこれが初めてである」と皮肉な説明を受ける。巨石は新聞というものは「海石の屋敷に行つた折読めばよい。また電車にでも乗つた時隣席のものが広げている新聞を盗み読みすれば月に四、五十錢がものは目に見えて経済になると考えていた」という「せこさ」である。内山海石が畳のこげに大騒ぎするの「せこい話だが、巨石の「せこさ」はこの内山海石や大須賀顕正のそれより可愛い。海石や大須賀が人前では尊敬されようと振る舞うのに対して、巨石はただ目の小さな利益にゆき振られるだけで、滑稽ではあるがその心根はせつない。

「せいざ」の醸す滑稽といえば、山の手の二流花街の建物・風情も「せこく」、そこで繰り広げる歡樂も自ずから「せ

こい遊び」となるも必然で、滑稽な感じが充滿する。ちなみに白山の描き方は「裏通り板屋根のぼろぼろに腐った平屋立の長屋のみ立ちつづいた間々に、ちらばらと新しい安普請の二階家、松なんぞ申訳らしく植込んだ家もあって、白山の色町は其処此処に松月、のんき、おかめ、遊樂、祝い、いさみなんぞという灯をかがやかし、金切声振絞る活惚に折から景氣を添えている家もあつた」と書かれるが、内装はもつと安普請ぶりが記される。麻布も「近頃かういふ土地にはどこにも見られる安普請の二階建である」というくぐりから二流の花街の滑稽なまでのたたずまいの説明が始められる。花柳界の華やかさを裏切るような描きぶりで、せこく色あせた空間が現出する。その「せこさ」をたたみかけたのは富士見町の鵜崎巨石の自宅が「門口の電燈の名前を書き替へた位の事」で、すぐに芸者屋になつてしまつたことである。安直な変化だ。おまけは、その巨石の旧宅を巨石自身が買い取つて小花と彼女の姉のお町に新亀千代富士といふ芸者屋に看板を書き替えさせてしまつたのだ。これ以上の滑稽な話はない。「恥の上塗り」ならぬ「滑稽の上塗り」といっていい。

五つ目の「滑稽諧謔の方法」としては「滑稽なしぐさを描く」という定番の手法がある。人の動作やふるまいが、なにかしら滑稽で笑いを誘うことがある。とくに人の小さな失敗は「東海道中膝栗毛」の弥次さん喜多さんを引き合ひに出すまでなく滑稽本の基本のお笑いパターンである。ドタバタ喜劇でも、コケたり、物にぶつかったり、痛い目にあう作中人物の失敗（しくじり）が観客にとって蜜の味である。『おかめ笹』でも、滑稽の基本技法の「滑稽なしぐさ」が、とりわけ失敗のしぐさが描かれる。たとえば、第十三章での場面がそうである。新婚の内山翰は夜遅く家に帰る。妻蝶子の怒りの声に迎えられ、しがみつかれる。ふりほどくつもりだったが、蝶子は飛ばされ障子にぶつかり大騒ぎとなるドタバタ喜劇さながらの場面。また、大須賀家に招かれた巨石は式台のある玄関をわざと遠慮して、内玄関に回ると犬に吠えられ驚く場面の描き方も滑稽味を狙つたものだ。そのあと座敷に通され待っている時、大須賀

頭正の部屋に入つて来るのを察知した巨石の次のように記される態度。「伸ばした首を亀の子のように引込ませると共にお尻が後の襖につくかと思われるまで後じさりして平蜘蛛の如くなくばい……」という卑屈と思えるほどの動作も、大須賀の尊大な態度と対照的なものとなり、大須賀が空疎な人物だけに巨石の大げさな片思いにちかい敬意表現が滑稽なものとなる。第十二章で内山翰が妻の居ぬ間の女遊びと欲を出して上がった麻布の待合に呼んだ芸者が、見せ物に出してもいいような大女で、さすがの女好きの翰もほうほうの体で逃げだす場面も滑稽本によくある描き方である。

六つ目にあげられる「滑稽諧謔の方法」は「デフォルメや洒落、ネーミング」などで滑稽さを醸す手法である。たとえば、否定的な人物には、その俗悪さが浮かび上がるような容姿として表現し、すこしばかりデフォルメ（誇張變形）を施すのである。内山海石と組んで小さな古道具屋から有名骨董商として成功をおさめた幸水堂主人は「乱杭の如き歯にも上下むやみに金を入れているのが物言う度々、禿頭の押潰したような下賤の痘面あはたらに、一種不思議な光彩を添える」と俗そのものの容姿として描かれる。一方、芸術家とも思えぬほど儲け話に入れ込む内山海石もやはり厳しい描き方をされる。「実業界に散見する富豪や重役などの顔にはよくありがちな、形を成さぬ一種の妙な顔である。髪は半白でありながら皮膚は気味のわるいほどいやに赤くてらてら輝ひかつて子供の顔をそのままふくりましたような顔である。」と俗臭と奇怪さが混合したまさしく「妙な顔」の持ち主と描かれる。大須賀もまた、「年齢は六十近く半白の頭髮を五分刈にしおそろしく細長い顔のこけた頬から突出た頤をばこれも半白になった長い髭に蔽わせた様子。大島紬の上に重ねた厚綿の八丈の書生羽織とよくつり合っているかにも豊かな上品な隠居らしく内々で骨董屋の上前をはねる人物とは夢にも思われない」と多少穩当な描きかたをされるが、皮肉な語り手の言い方から免れてはいない。「乱杭の金歯で禿頭で痘痕面」の幸水堂主人といい、「おそろしく細長い顔」の大須賀頭といい、「子供の顔をそのままふく

らましたような顔」の内山海石といいポンチ絵に出てくる俗物、今日的に言えばマンガに出てきそうなキャラクターである。

女性だつて描写において容赦はない。これまで、どんな女でも貪つてきた好色な内山翰も逃げだしたという麻布の芸者は「山出しの下女を少しどうかしたような平べったい顔の油ぎつた小鼻の側と髪の抜上ったおでこの生際とに地ばれのした大きな吹出物がある。身体は見世物の大女に出してもいいほどがっしりと肥っているが眼の縁気味わるく黒ずみ、人を食いそうな大きな口の前歯四、五本に金を入れた様子」と誇張したタッチで描かれる。なけなしの金をはたいて買った女が、この女か、という驚きをふくませて滑稽さを醸している。白山の待合美登利に登場する女たち、つまり女将、君勇、小花、三太など芸者たちも、わずかな金で客とすぐ寝る枕芸者ばかりで粹も意気もなく、君勇は「カフェのボーイ」、小花は「牛肉屋の姐さん」と手厳しく比喩される。花柳界の美意識の欠如した安直な性風俗の世界となっている。『腕くらべ』に出てくる新橋芸者たちとは格段の差がある。また、美登利の名から樋口一葉の『たけくらべ』の主人公の美しいイメージを連想しようとしたつて無理な話である。雲林堂がバックについている待合の「愉快」のネーミングも実態から離れて滑稽で、小心翼翼とした鵜崎巨石の「巨石」もなんだか名前が裏切つていて滑稽な感じを与えるのである。こうした細かい滑稽のしかけは作品全体の滑稽味を増すスパイスとしてきいている。

七つ目の「滑稽諧謔の方法」には、荷風独特の「うがちやアフォリズム」による滑稽味を醸す方法である。世間的常識や観念に隠れた真実を巧みに言い表わして、そうした常識や観念に埋没する人間の滑稽な姿を讀者に見せる。たとえば、不良息子の内山翰は親の希望どおり結婚するが、語り手は翰に「放蕩も結婚も事実の要点においては少しもちがいはない。然るに一は秘密であり罪悪であるのに一は公明正大でありそして親孝行になる」と結婚制度の不思議さを語らせる。男女関係をすぐに性的関係と結びつけて捉えてしまう翰は「芸者も奥様も女に变りないじゃないか」

と、滑稽な結婚制度を揶揄する。ほどよい皮肉は滑稽な味をつくり、滑稽な描写は鋭い皮肉に変じることがある。荷風の皮肉と滑稽は紙一重で行き来している。そして、女についても翰は不思議に思う。初夜を過ごした妻蝶子が、さぞかし、昨夜の出来事を思うと朝、家の者に対して恥ずかしい思いをしているだろうと「聊か滑稽」を感じていた。ところが、蝶子はその想像に反して快活に「お早ようございます」と挨拶しているではないか。翰は、つくづく「女というものは猫と同じように貫われて来て一度飯さえ食べばすぐにその家のものになってしまう。妙に馴々しいものだと思わざる得なかった」と思う。ごく普通なことと受け入れられてきた新妻の態度が、翰のような女遊びの極楽とんぼから見れば不思議にみえたのであろう。人があまり気づかない見方で、こういう結婚・初夜といった儀式をめぐる人のふるまいの不思議さを指摘されると、なるほど滑稽な話だと気づかされる。まさしく「うがち」の醸す滑稽味である。また、巨石は待合愉快で小花と遊ぶが、たった二円で恋人でも夫でもない男にここまで性サービスするのかと驚く。金のために生活のために人は仕方なく醜態として働くものだが、この芸者の振る舞いは金を前にした人間の滑稽な振る舞いそのものに見える。巨石も金のために内山海石や大須賀顯正や画商たちの間を動き回っている。その巨石がこの小花に驚き突き抜けて滑稽を感じるのである。金に踊らされている巨石が、金で買われて恥ずかしげもなくサービスにつとめる芸者に驚く。読者は巨石の反応に、ブラックユーモアといっている、いささか暗い滑稽を感じさせられるのである。

このように荷風は、「見かけと実態のちがいを暴き描く」「思惑のちがいを描く」「偶然の力による皮肉な結果を描く」「人間的弱点のリアリズム」「滑稽なしぐさを描く」「デフォルメや洒落、ネーミング」「うがちやアフォリズム」といった手法を駆使して「滑稽諧謔」を醸す試みをしている。しかし、当初荷風が抱いた目論見、つまり「野卑醜陋なる現代社会の事相に接するや時に駄洒落まじりの戯文を弄し以て聊か溜飲を下げんと欲す」は成功したのだろうか。と

同時に読者もまた「滑稽諧謔」の筆の力で、思わず笑い、吹き出すことが出来たのだろうか。

III

『おかめ笹』執筆のネライの一つにあげられるのが「あとがき」のこんな言葉である。

意想外の事件とは即この滑稽小説の骨子にして曲折波瀾あり読者を倦ましめざらんとする作者の用意また専らこゝに存す然れどもその真意のある処は成功せる画家海石その子翰その姻戚老官吏某狡猾なる骨董商等個々当代人の心理を描写しまた我国古美術鑑賞家反面の消息を伝へて作者平常の鬱気を散ぜんとするにあり

「文明一周年の辞」における「戯文を弄し以て聊か溜飲を下げんと欲す」といい、この「あとがき」の「作者平常の鬱気を散ぜんとするにあり」といい、荷風はその頃の世相風俗、時代精神にかなりストレスを高めていたことがわかる。荷風は『おかめ笹』本文の最後のところで、「この小説は大正四、五年頃の時代を写したるものと御承知ありたし大正七年以後物価の騰貴人情の変化甚しければここに一言御断り致すなり」と書いている。つまり、第一次世界大戦の戦中戦後の世の中に荷風は目をこらしていたのである。単に目をこらしていたばかりではなく、憤怒に爆発しそうで、どうかしてその怒りを発散したいと思っていたのだ。荷風の怒りの矛先は、一体何だったろうか。その一つに大戦を契機にした日本の構造変化と断つていいかもしれない。日清、日露の戦争を経て日本は急速に資本主義国として力をつけ、第一次世界大戦で世界でも有力な資本主義国としての地歩を固めた。日本は好むと好まざるにかかわらず、資本主義国家として構造変化しなければならなかった。たとえば、大きな資本力のあるものが小さな資本を食う弱肉強食、経済効率の重視、あらゆるものが商品化され、商品価値の高低が価値基準となる、そうした資本主義の基本原則

が文化精神面に次第に波及して、日本全体を根底から揺さ振りはじめていたのである。

荷風が好んだ花柳界も商品経済、経済効率重視の荒波から逃れられない。風流などお構いなしの安直な遊び方がはやり、とりわけ『おかめ笹』に出てくる白山、富士見町、麻布など新興地や二流の花街は一流といわれた新橋、柳橋以上に顕著にその流れに押し流された。むしろ新興歓楽街は時代の「欲望」を先取りしていた。『おかめ笹』に出てくる芸者は、不見^{みず}転^{てん}芸者ばかりで「性の商品」そのものであった。むろん、客も手っ取りばやく「女性」にありつこうとして、風流も粹も承知していない。客の質の低下は、江戸以来の商人や職人にかわって、花街の伝統を知らない新官僚や新しい新興産業に従事するホワイトカラーの台頭と連動していた。こうした風流も粹もそっちのけで、「金銭」で安直な遊びをする典型として、第一次世界大戦による好景気で登場した各種の大小の「成金」たちの姿が荷風の目に残った。

第一次世界大戦で日本の産業界は好景気で沸き、船成金、為替成金^{注(4)}、などのほか、労働者の中にも月給三百円もとる「成金職工」(『大阪毎日新聞』大6・7・14)と呼ばれる小成金がでるなど、いわゆる成金ブームが沸き起こった。荷風が「あとがき」の中で憤慨している「大正七年以後物価の騰貴」とは、大戦で輸出が激増したが日本の生産力を無視した輸出で、国内の生活必需品が不足し値が上ったことを指摘していた。政府は大正六年九月「暴利取締令」を公布して、売惜しみ、買い占め防止策の手をうった。しかし、なかなかおさまらず日本の文化精神の深いところで「成金」は影響することになる。『東京朝日新聞』(大7・7・8)では「極東成金国」という文章が掲載され、「日本は金儲け許りでなく学芸も思索も政治も悉く有効有利、即ち、役に立て、金にする成金主義でやらうとして居る」と、政治はいうまでもなくものの考え方も学芸も「金儲け中心主義」になってきていることを指摘している。

「成金」と「成り上がり者」を、荷風がどこまで弁別していたかは分からぬが、いずれも文化的伝統を切断し、毀

損しているという意味で軽侮の対象であつたことは間違いない。たとえば、『おかめ笹』の内山海石や大須賀顕正という二人の「大物」も、所詮「成り上がり者」であることを書き込んでいる。内山海石は貧農の生れで、金沢の旅館の雇い人になっていた。ある時偶然客間の襖の修理をしたのを宿泊していた京の画家玉木紫石に見いだされて弟子となり世に出たと記される。また、大須賀顕正も区役所の書記から「小才と弁口」とで、とりわけ勉強したわけでもなく「知事になりました」人物と描かれる。この当代の名士紳士が、結局「成り上がり」の偽物であることを読者の前にさらす。好景気は新しい料理屋や待合を開業させ、山の手をはじめ場末の花柳界を誕生させた。料理屋や待合が建設されれば、座敷の床の間の掛け軸はじめ装飾用の日本画が必要となる。^{注5)}日本画家内山海石の富と名は第一次世界大戦による好景気の、いわばバブル景気の象徴といつていいものだ。成金ブームはたくさん偽物をつくりだしたのを荷風は苦々しい思いで書き綴つたのであつた。

「偽物の流行」「成金の流行」「金儲け中心主義の流行」に荷風は怒りを覚え、滑稽諧謔の筆をふるつて『おかめ笹』を書いた。確かに事実において荷風のこの認識はほぼ誤りはなかったかもしれない。ただ、認識が正しかったとしても事実の受けとめ方は人それぞれに微妙である。「偽物の流行」「成金の流行」「金儲け中心主義の流行」で出会つたのは、結局人間たちが欲望にからめとられてゐる姿、つまり人間の卑小さであろう。それに対する受けとめ方は人によつてちがう。ある人は「人間の卑小さ」に出会つて「せつなく」思い、むしろ愚かしい人間を「愛すべきもの」と思う。しかし、荷風の場合は「怒り」を覚えた。

笑いには、ストレートな笑いとひねりのある笑いがある。荷風の『おかめ笹』は、どちらかというと後者をめざしたもののだが、結果的にうまく笑えない小説になった。「人間の卑小さ」に出会つて、そこから人の世の當みの可笑しさを紡ぐ滑稽とちがって、荷風のは怒りから生まれた滑稽になった。人間の愚劣さをいとおしいと思えない分だけ滑稽

は冷えていた。「冷笑」はあつても「温笑」が乏しかった。確かに構成も人と人との関係交差を中心にすすめ、構成の王道をゆき巧みな小説といつてよい。そして、荷風は力を入れてディテールにこだわったが、面白くなるはずのディテールも怒りの文脈に従わされている。

人間の愚劣さを、怒りではなく人の世の営みのせつない可笑しさに、うまく変換させるのがいわば滑稽の力と言えるかもしれない。読者は、その滑稽の力で笑わされるのだ。上流の名士紳士も鷹揚に構えながら庶民と同じように日常生活の細部で欲と見栄、せこさを見せながら生きている。大多数の読者は、それを見て笑つてしまうのだ。糾弾するような視点ではなく、どうせ人間なんてダメなところがあるんだからそれを認め合つて仲良くやるより仕方がないではないか、と見る。その視点があれば読者は筆者とともに大いに笑える。愚劣さが多少自分にも心当たりのある読者にとって、もし厳しい糾弾や怒りから生れた滑稽なら、心の底から笑えないのだ。

第一次世界大戦の戦中戦後、おそらく荷風には単にニュース情報からだけでなく、肌で日本全体が、そして日本の良質な伝統が「壊れてゆく」という恐怖と不安に強く支配されていたにちがいない。ところが、この恐怖と不安の感情は怒りの形はとるが革命の形をとらない。革命にはいかに革命組織をつくるかという組織論と、いかに革命行動をすすめるか運動論が必要で、荷風にはむろんない。荷風は組織論と運動論をもたない単独者である。大戦後の日本情勢を分析する社会科学の成果も乏しく、荷風もまた取り入れようとせず愚劣な行為は、あくまで個人の資質と性格によるという理解にとどまる。内山海石も大須賀顕正の愚劣さも個性の問題であつた。それは、どんな社会状況にあつても善良にふるまえる人はいるといふ点をもて人間解釈として妥当といえるかもしれないが、決して荷風の怒りは革命につながる。変革は企図されない。ありうべき姿を見いだせない怒りという批評精神は結局自憤の形になる。自憤は自己のなかで循環し、静まるのを待つより手はない。手厳しく皮肉たつぷりに「滑稽諧謔の方法」で切つ

たもの一向事態は変わらず、ひよつとして滑稽なのは熱く批判する自分かもしれないという気持ちで、沈静した荷風の中で多少よぎったかもしれない。庶民はどんな愚劣な政治家・官僚が現われようとも時代に合わせて生きてゆくし、むしろ上手に諦めて熱く怒ることもなく営々と日々を過ごしている——そのことを荷風は改めて思い噛みしめた。これまで、荷風は間欠泉のように激しく怒り、それが鎮まると反転して今度は諦めの境地に身を置くというパターンを繰り返してきた。しかし、『おかめ笹』では従来のような直接的な怒りをおさえ「滑稽諧謔の方法」で転換させるという試みを行なった。しかしながら方法自体は成功しながら、うまく読者を笑いに巻き込むまでにはいたらなかった。もともと、荷風の目ざした「滑稽諧謔」のおかしみは別のところにあつたかもしれない。工夫をこらした『おかめ笹』は怒りを「滑稽諧謔の方法」で転換させる新方式を開発させたが、逆に新たな苦しみを荷風に与えた。結果的に、熱く怒ることの限界を知らされることになったのだ。このあと、『おかめ笹』の成果は別の形でひきつがれる。つまり、小心翼翼の巨石を書きえたことによって荷風は、上流階級の愚劣さとうまくわたりあつて逞しく生きる健気な庶民の世界をあらためて見直すことになる。このあと、荷風は激しい怒りを静め『雪解』（大11）、『ちぎらし髪』（大13・11執筆）など、下町の裏町に住む人々の、しみじみとした生活ぶりを描くのであつた。

注

- (1) 「文明発刊の辞」（大5・4）
- (2) 宮城達郎は『永井荷風』（昭40・10）の中で「これほど詩情を拒絶した小説は荷風文学中他に例を見ないのであり、作者は完全に作品世界を締めだしている観がある」と述べている。
- (3) 拙稿『腕くらべ』——猥褻の方法と風俗の方法」（『楳山国文学』へ平3・3のち『永井荷風ミューズの使徒』へ平7・12 勉誠社刊）所収。

(4) 拙著『日本のシゴトロジ』(平3・9 東京書籍刊)

(5) 江藤淳は『荷風の散策―紅茶のあとさき』(平8・3)で、こうした欧州大戦後の日本画の需要増加をとらえて「作者は明敏にもこの世相を描くに当って、帝室技芸員内山海石の執事を務める鶴崎巨石という名ばかりの日本画家を拉し来り、一篇の主人公に据えた」と荷風の世相批判の鋭さを指摘している。